

【vol.79】オルタード・ドミナント・スケールを使ってみる

どうも、大沼です。

今回は、少し特殊なスケールとして、登竜門的な感覚のある(?)、
『オルタード・ドミナント・スケール』の実践編です。

スケールの名前はよく聞くはずですが、自力でポジションなどを覚えて練習してみても、
イマイチ、使えている実感のないスケールではないかと思えます。

とは言え、ジャズ系のジャンルで御用達のスケールですし、構造も響きも、
一般的な感覚から離れているので無理もない所ですが。

ですが、だからこそ、こういったスケールを使えると、チャーチモード系オンリーの
ストレートな響きから逃れられ、新しい世界が見えてくる、とも言えるでしょう。

最初は、理解、把握するのが少し大変だと思いますが、
ちょっとした、中級者～上級者のトビラを開けていく感覚で、
今回、基礎から使い方を学んでいきましょう。

では、今回の題材である『オルタード・ドミナント・スケール』ですが、これはメロ
ディックマイナーの、7度の音をトニックに設定して弾き始めるスケールでしたね。

呼び方としては、「オルタード・スケール」でも構いません。このテキストでは、以下、
文脈的に不都合がなければ「オルタード」と省略して呼ぶ事が多くなると思います。

このスケールが頻繁に出てくるジャンルとしてはジャズが挙げられますが、リードプレイ
にジャズっぽい感じを出したい時や、普通のポップスやロック等でも、ジャジィな響きが
許される様な楽曲ならば、ある程度は使えます。

一応、さわりとして、メロディックマイナー全体の解説の時に重要ポジションを少し弾い
てみましたが、今回は、

- ・スケールそのものの構造

- ・メロディックマイナー上に出来る、7度のダイアトニックコードとの関係性
- ・実際のプレイでは、どの様に見たら(考えたら)使いやすいのか？

と、そういった部分をやっていきたいと思います。

このスケールも、最近学んでいた、リディアン♭7thなどと同じ「ドミナント(系の)スケール」に分類されますね。

これまで、オルタードを自力で学習したことのある人は、ポジションは覚えられても、指板上でスケールが捉えにくく、使えているのかわからない、と言う状態になっている人もいないかと思いますが。(※僕はそうでした)

実際のプレイでは「スケールポジションそのもの」を見て弾くよりも、「X7か、1度 (IM7 or Im7)のコードのコードフォームの近くにある音」を選んで弾くと、最初は分かりやすいでしょう。

なので、スケールポジションをパラパラ弾く、と言うよりは、『X7のコードがあって、その上でスケール音を弾いて、解決先のトニックコードのコード・トーンに向かう』と言う、シンプルな練習を今回は重点的にやっていきたいと思います。

さて、オルタードスケールは、主にV7上で使うことになるのですが、一応、解決先のコードが、メジャー系の1度でもマイナー系の1度でも、どちらでも使うことができます。

とりあえず今回は、基準にするキーはkey=Amでいきましょう。

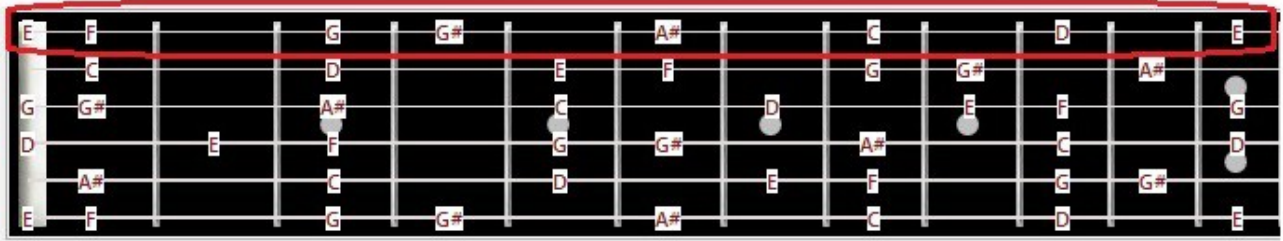
この場合の『1度のコード(Am or Am7)に解決するドミナント7thであるE7上で、Eオルタード・スケールを使う』と言う観点で練習します。

では、スケールポジションの復習に入る前に、そもそも、オルタード・スケールのインターバルなのですが、多くの場合、

root、m2nd、m3rd(=#2nd)、M3rd、♭5th(dim5=#4th or #11th)、m6th、m7th

と、されている事が多い気がします。(※m3rdと#2nd、♭5thと#4thは異名同音)

※E オルタード・スケール



※G#をA♭、A#をB♭に読み替えて下さい

ですが、このままだとスケールのメジャー or マイナーを決める 3rd の音が重複するので、

root、m2nd、m3rd、♭4th(dim4)、♭5th(dim5)、m6th、m7th

と、本来は、4音目はM3rdでは無く4度音として、全体をこの様に見るべきかもしれません。(※純粋にインターバルを数えるならば)

Vol.72でも少し解説しましたが、オルタードはメロディックマイナーの第7音から始めたスケールでしたね。

※メロディックマイナーのダイアトニックコードとモード・スケール

I mM7	メロディックマイナー
II m7	ドリアン♭2nd
♭III aug M7	リディアン♯5th(リディアン・オーギュメント)
IV 7	リディアン♭7th(リディアン・ドミナント)
V 7	ミクソリディアン♭6th
VI m7(♭5)	エオリアン♭5(ロクリアン♯2)
VII m7(♭5) or VII7(♭5)	オルタード・ドミナント

この表には、オルタード・スケールから構成されるコードとして、VII m7(♭5)とVII 7(♭5)の2つが載っています。

これを考えていくと、ある種、1音目から正當に音を数えていったインターバルと言える、

root、m2nd、m3rd、♭4th(dim4)、♭5th(dim5)、m6th、m7th

からは、3度積みの場合、赤字の音を選択され、VII m7(♭5)のコードが構成されますね。

理論書などで勉強したことがある人は知っているかもしれませんが、メロディックマイナーの7度スタートのスケールとしては、オルタードの他に『スーパー・ロクリアン・スケール』と言うものが出てきます。

スーパー・ロクリアンは、構造としては、通常のロクリアンスケールの4度の音が半音下がったもので、先ほどのVII m7(♭5)のコードに対応しています。

これに対してオルタードは、インターバルを以下の様に見て、

root、m2nd、m3rd(=♯2nd)、M3rd(=♭4th)、♭5th(=♯11th)、m6th、m7th

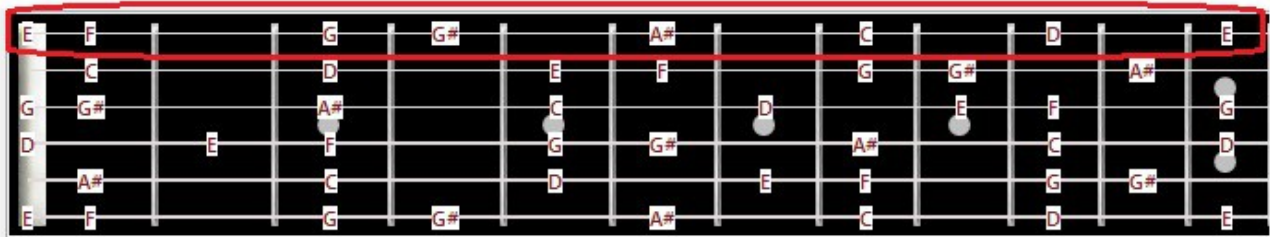
赤字の音を選び、X7系(上のインターバルだと正確にはX7(♭5))のコードを形成し、ドミナント・スケールとして対応させている、と言う事になりますね。

(※X7(♭5)は、X7(♯11) omit 5thの様を考えるべきかもしれません)

で、この中の、m2nd(=♭9th)、m3rd(=♯2nd=♯9th)、♭5th(=♯11th)、m6th(=♭13th)の4音が、『オルタード・テンション』とされる音になるわけですね。

(※m3rd(=♯2nd=♯9th)、♭5th(=♯11th)の2音は異名同音)

Eオルタード = Eスーパーロクリアン (=Fメロディックマイナー)



※図ではG#をA♭、A#をB♭に読み替えて下さい

色々調べてみたところ、元々はVII m7(♭5)とスーパー・ロクリアンがメロディックマイナー由来の7度に対応していて、オルタード・スケールは後付け的に、X7コードにドミナント・スケールとして対応させたものの様です。

スケールの構造としては(平均律的には)どちらも同じなんですけど、スーパー・ロクリアンの方は、M3rdとm7thを含まないことになるので、ドミナント・スケールでは無くなりませぬ。

これらのスケールを見た時、一般的な(主にポピュラーミュージック系の)ギター演奏では、スーパー・ロクリアン的な考え方で使われている事はそこまで多くないと思うので、このテキストでは、主にオルタードの方向から使い方を見ていきます。

一応、スーパー・ロクリアン的な使用例も簡単に解説しておく、対応しているコードであるVII m7(b5)と、他のモード・スケールとの関係性を見ていくのがわかりやすいですね。

この、メロディックマイナーのVII m7(b5)が、メジャーキーの7度のコード(VII m7(b5))や、マイナーキーの2度のコード(II m7(b5))と同じコードタイプなので、これらを相互に入れ替える事が出来ますね。

この共通項を利用する事で、メジャー&マイナーキーの楽曲の中で、Xm7(b5)のコードを起点に、滑らかなスケールチェンジ(モードチェンジ)が可能です。

具体的には、

- ・メジャースケール = I アイオニアン(=VII ロクリアン)
⇔ メロディックマイナー (=スーパー・ロクリアン)
- ・ナチュラルマイナー = I エオリアン(=II ロクリアン)
⇔ メロディックマイナー (=スーパー・ロクリアン)

と、こんな感じです。

この様に、スケールと、そのスケールから構成されるコードの両方の観点から見ていくと、キーチェンジ、スケール(モード)チェンジなど、様々なアレンジのアイディアに繋がっていきます。

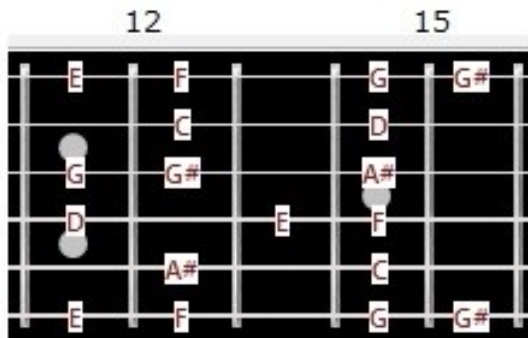
では、前置きが長くなりましたが、オルタード・スケールの実用ポジションから見ていきましょうか。

まずは通常の6&5弦ルートの代表的なポジションです。これは過去のテキスト(Vol.72)で一度やったものですね。

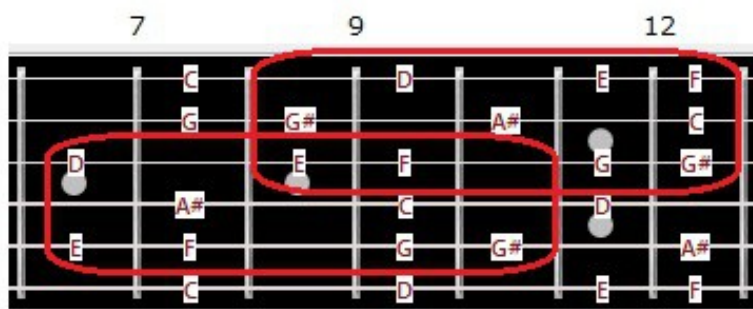
メロディックマイナーの半音下から始めるだけ、と考えるとわかりやすいでしょう。

※E オルタード・ドミナント・スケール(6弦トニック)

(※以下、全ての画像のG#をA♭、A#をB♭に読み替えて下さい)

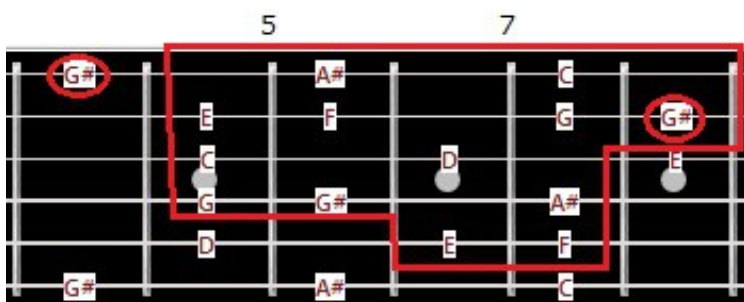


※E オルタード・ドミナント・スケール(5弦トニック)



以上が前にやったものでしたね。今回はこれに加えて、5弦トニックのポジションをもう1つ覚えましょう。

※E オルタード・ドミナント・スケール(5弦トニック)



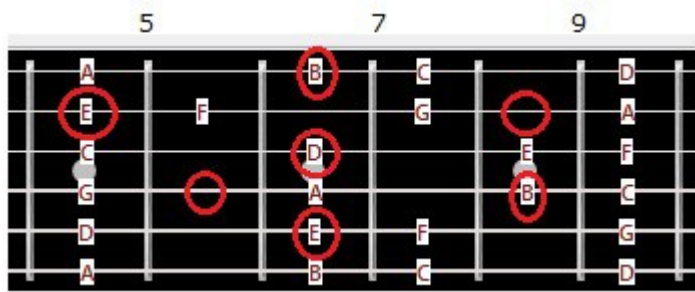
※丸で囲ったA♭(図ではG#)の位置はどちらも把握しておきましょう。

ここは、6弦6フレットのB♭音(図上ではA#)トニックの、リディアント7thのポジションと重複しています。そちらが見やすいならばそれでもOKです。

さて、今回はAmキーを基準に考えているので、この場合の1度にあたるAm7に解決しようとするドミナント7th、即ちE7の上でEオルタードを使う、と言う事でしたね。

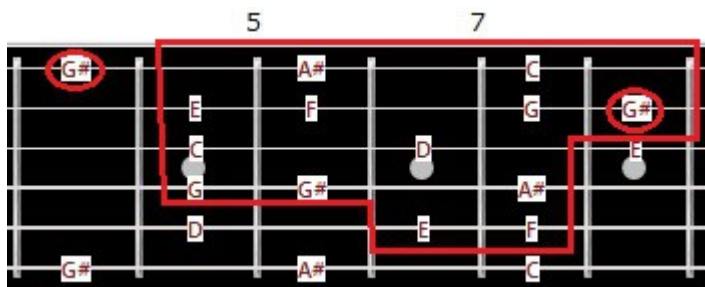
なので、マイナーのⅡ-V-I、Amキーであれば、Bm7(♭5)→E7→Am7の様な進行の、E7の上でEオルタードとなります。

これを指板上で端的に表すと、このコード(E7)の上で、

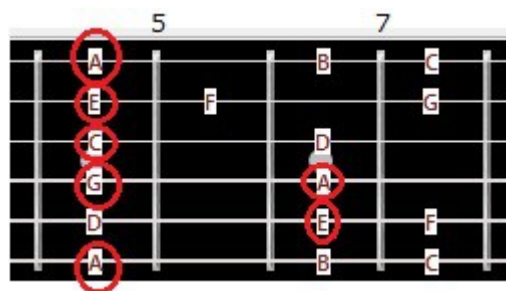


※赤丸はE7の構成音

この辺り(もしくは他の場所でも可)のEオルタード・スケールを使って、



これらの音(Am7 or Amの構成音)に解決すればいいわけです。



どちらかと言えば、Am7のm7th音であるG音よりは、マイナートライアドのA、C、E音に進んだ方が、シンプルに解決感が強くなりますね。

早速、今載せた3つの指板図周辺を使って、譜例をいくつか弾いてみましょう。

コード進行は先ほどお話ししたように、Bm7(♭5)→E7→Am7になります。

この内、Bm7(b5)上では、A ナチュラルマイナースケール(=A エオリアン=B ロクリアン)を使うこととなりますが、今回はオルタードに集中したいので、コードを鳴らすのみにしてあります。

この進行は、過去にも何度かやっているのですが、Bm7(b5)上でフレーズが弾きたい場合は、それらを参考にして、自由に作ってもらっても構いません。

※譜面はストレートになっていますが、ジャズっぽいスウィングのリズムでも弾いてみましょう。

※スケールの響きを感じられる様に、出来る限りコードバックングを作って、その上で弾いて下さい。

譜例 1、key=Am II-V-I (E オルタード・スケール)

譜例 2、key=Am II-V-I (E オルタード・スケール)

譜例 3、key=Am II-V-I (E オルタード・スケール)

と、言う事で、オルタードの響きとしてはこんな感じです。

バックで鳴っているコード、E7(E、G \sharp 、B、D)に対して、Eオルタードの構成音は、

E(root)、F(m2nd= \flat 9th)、G(m3rd = \sharp 9th)、A \flat (=G \sharp) (\flat 4th=M3rd)、B \flat (\flat 5th= \sharp 11th)、C(m6th= \flat 13th)、D(m7th)

となっているので、赤字で示したオルタード・テンションを鳴らした時、特に強く緊張感を感じるはずです。(※一応、 \flat 4thにあたるA \flat 音は、M3rdと異名同音の様にしています)

逆に、E7のコード・トーンであるE音やD音を鳴らすと、普通に安定しますね。

この辺りのさじ加減は、大方、演奏者の自由なので、鳴らす音を選んで行くことで雰囲気調整することが出来るようになります。

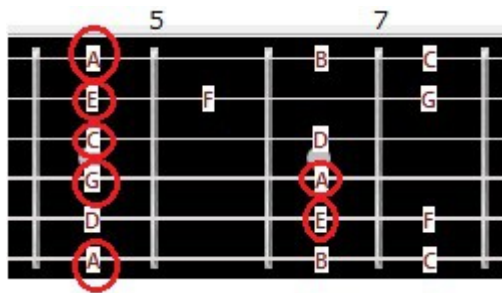
さて、基本的な事はこの位にして、次は『どうすればスケールポジションや、弾くべき音が見やすくなるのか?』と言う事についてやっていきましょう。

これまでやってきた、ディミニッシュやリディア \flat 7thなど、少し特殊なスケールは、初めの内は、視覚的にも聴覚的にも「何をどうしたらいいのか?」が分かりにくい所があります。

その辺り、もっとシンプルに構造を捉えて、演奏しやすくなる様な方法を考えてみましょう。

まず、今回の例ではkey=Amなので、トニックコード(トニックマイナーコード)は、Am(or Am7)ですね。

先ほどの譜例もそうでしたが、この、コードがAmに変わる所で、Amの構成音である、A、C、E音のどれかに進むと、いい感じに解決感が出るわけです。
(※Am7ならm7thのG音も)



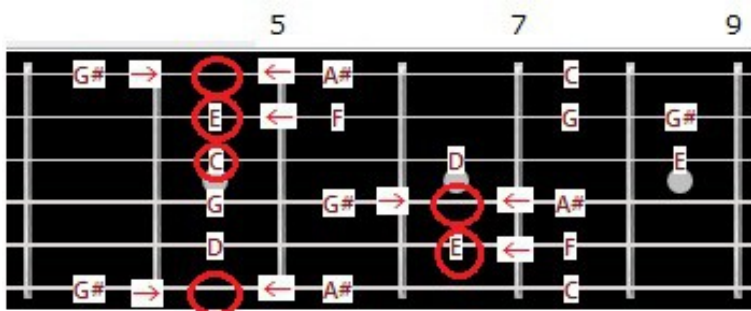
この3音は Am コードにとって、A=root、C=m3rd、E=P5th にあたります。

そして、E オルタード・スケールの構成音が、

E、F、G、A \flat 、B \flat 、C、D、

と、なっているので、Am のコード・トーンと重複している E 音、C 音、(Am7 なら G 音も)以外の音から、Am のコード・トーンに進むと、E オルタード→A ナチュラルマイナーと変化した感じが(強く)出ます。

※E オルタードの構成音と Am コードの位置関係((※赤丸が Am の構成音の一例)



さらに、上の図の矢印の様に、解決先の音と半音の距離にある音から、Am のコード・トーンに進むと、フレーズにスムーズさが出てきますね。

これらの事を踏まえて、今回は、E オルタードから、Am コードの root である A 音と、P5th である E 音に進むフレーズを、重点的にこなしていきます。

もちろん、m3rd である C 音や、m7th である G 音に解決してもいいのですが、

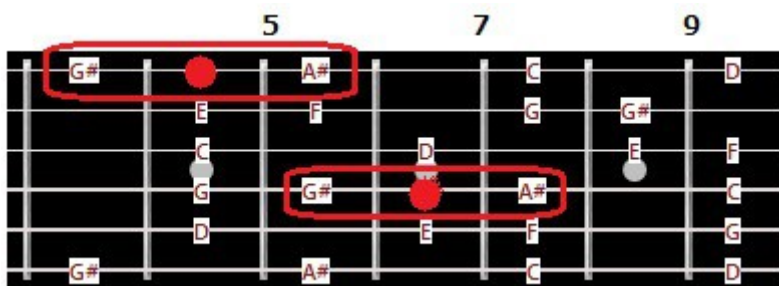
- ・ C 音は「E オルタードの構成音には、C 音に半音で隣接する音が無い」
- ・ G 音は「1、3、5 度の音に比べて、Am コードへの帰属感が少し薄い」

と言う事を理由に、とりあえずは置いておきます。
(※もちろん、実際の演奏では、それらの音に進んでも問題はありません)

では、まずは、Amコードの root である A 音に解決するパターンで、比較的弾きやすい場所を探ってみましょう。

例えば、1弦5フレットのA音に向かう場合、もう、すぐ両隣にEオルタードの構成音がありますね。

※E オルタードの構成音と、Amコードの root(A音)の位置関係



ついでに4弦7フレットのA音周辺も示しましたが、最終的に向かいたいA音の両隣にあって非常に分かりやすいので、これらは覚えてしまいましょう。

これらと同じ様に、6弦5フレットのA音に進んでもいいのですが、リードプレイとしては少し音域が低いので、ここでは除外しました。
(※使ってはいけない、と言うわけではありません)

E7上でEオルタードを弾く場合、E7にとって、A♭音は♭4th(=M3rd)、B♭は♭5th(=#11th)のインターバルとなります。

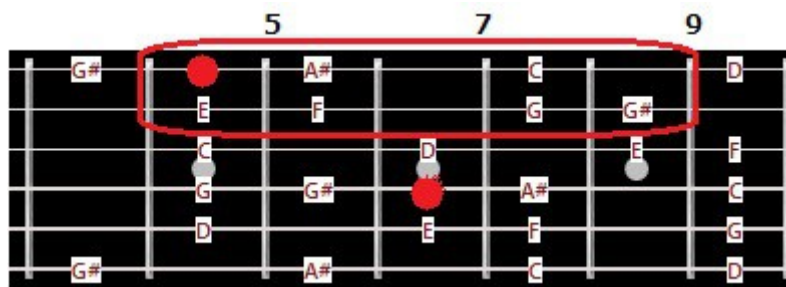
A音に向かう場合は、どちらの音も半音で接するので、導音的な役割も感じますね。

ちなみに、先に載せた3つの譜例は、これらの1弦か4弦のA音に、左右どちらかの音から解決するように作ってあります。

この辺りの関係性を基準に、あまり左手のポジションを動かさなくて済む、以下の様な場所を覚えておくと、スムーズに練習できるでしょう。

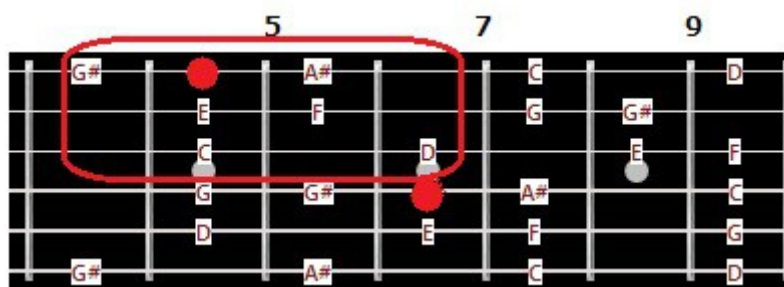
(※ジャズのスウィングっぽいリズムで弾くと雰囲気が出ます)

※EX-1



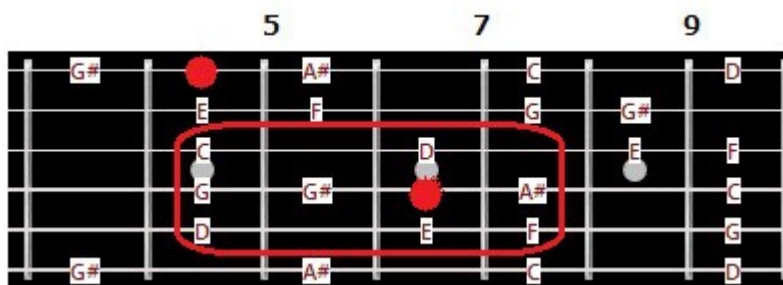
Musical notation for EX-1. The treble clef staff shows notes for Bm7(b5) (fret 17), E7 (fret 18), and Am7 (fret 19). The guitar TAB staff shows fret numbers: 6, 7, 7 for the first measure; 6, 9, 8, 6, 5, 8 for the second measure; and 6, 5 for the third measure.

※EX-2



Musical notation for EX-2. The treble clef staff shows notes for Bm7(b5) (fret 14), E7 (fret 15), and Am7 (fret 16). The guitar TAB staff shows fret numbers: 6, 7, 7 for the first measure; 5, 7, 5, 7, 6, 5 for the second measure; and 6, 4, 5 for the third measure.

※EX-3



※EX-4

これらの見方は一例でしかありませんが、まだ使い慣れていないスケールを練習する時、初期段階としては、『適当な範囲でポジションや音数を制限する』と言うのは便利な方法です。

こう言った、「自分にとってわかりやすい場所(とその周辺)」をいくつかピックアップして、これまで載せた譜例の様なフレーズを作って練習してみてください。

それをいつでも繰り出せるようになっておけば、そのままアドリブ時にも使えますので。

フレーズの作り方としては、オルタード・スケールの構成音内にある、オルタード・テンションとそれ以外の音の、配分や音価を考えて、雰囲気コントロールする、と言う観点を持つといいでしょう。

先にも載せましたが、E7コードに対する、Eオルタードの構成音の関係性はこうでしたね。

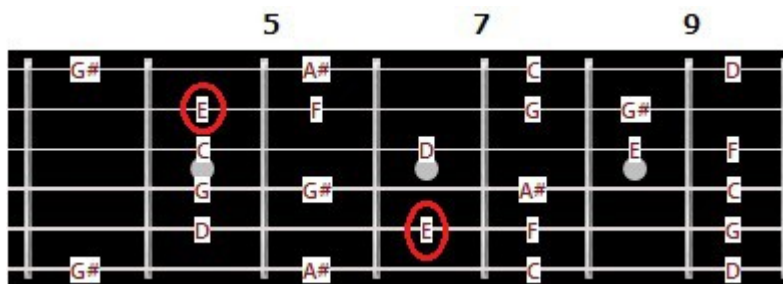
E(root)、**F(m2nd = ♭ 9th)**、**G(m3rd = #9th)**、**A ♭ (♭ 4th = M3rd)**、**B ♭ (♭ 5th = #11th)**、**C(m6th = ♭ 13th)**、**D(m7th)**

これらの音を E7 上で鳴らすわけなので、赤字のオルタード・テンションを使うと緊張感 UP、黒字の E7 のコード・トーンとの共通音を使うと安定感 UP、と言うのが大まかな傾向です。

こういった観点から、どの様に解決先の 1 度のコード(今回は Am)の構成音に向かうか？ と言う所を考えてフレージングします。

では、次に、Am の 5 度である E 音に解決するパターンを見ていきましょう。と、言っても、概要は A 音に進む時と同じですが。

例えば、6 弦(or 1 & 4 弦)に Am のルートを見るポジションならば、ここに E 音がありますね。



この E 音は、E7 のルートと E オルタードのトニックとも重複しているので、E7 に対しても、Am に対しても安定する音になります。

この場合、フレージングで考えられるのは、Am にコードが変わるタイミングで E 音を鳴らすパターンと、E7 → Am 間で E 音を鳴らし続けるパターンです。

譜例 1、Am にコードが変わるタイミングで E 音を鳴らすパターン

譜例2、E7→Am間でE音を鳴らし続けるパターン

Musical score for Example 2. The score is in 8/8 time and features three measures. The first measure (measure 29) is marked with the chord Bm7(b5). The second measure (measure 30) is marked with the chord E7. The third measure (measure 31) is marked with the chord Am7. The melodic line consists of eighth notes: B2, D3, E3, F#3, G#3, A3, B3. The guitar tablature shows the fretting for each measure: Bm7(b5) (6, 7, 7, 7), E7 (7, 8, 5, 6, 8, 5, 7, 5), and Am7 (5).

上記の譜例1はAmに切り替わった所で安定感を強く感じ、譜例2の方は、フッと肩透かしを食らったような感じから、徐々に安定する様な感覚になると思います。

さらに、両コードの共通音を連打する様なパターンも考えられますね。

譜例3

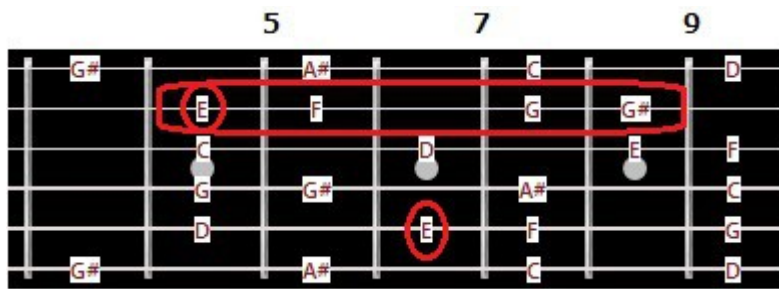
Musical score for Example 3. The score is in 8/8 time and features three measures. The first measure (measure 32) is marked with the chord Bm7(b5). The second measure (measure 33) is marked with the chord E7. The third measure (measure 34) is marked with the chord Am7. The melodic line consists of eighth notes: B2, D3, E3, F#3, G#3, A3, B3. The guitar tablature shows the fretting for each measure: Bm7(b5) (6, 7, 7, 7), E7 (7, 8, 5, 6, 8, 5, 7, 5), and Am7 (5).

この場合のE音は、E7、Amのどちらにとってもコード・トーンなので、気兼ねなく弾くことができます。

見た目としてはそこまで変わっていませんが、それぞれ響きの感じは違うので、コントロール出来ると面白いですね。

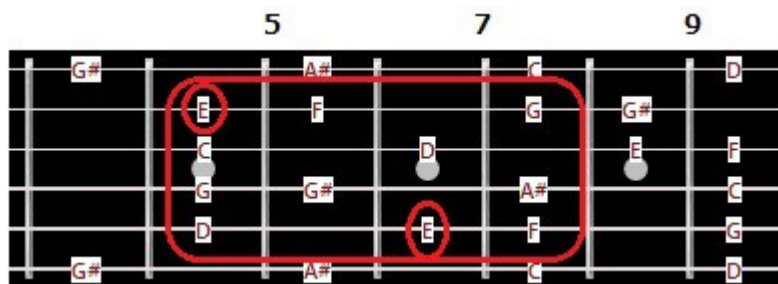
この様に、今弾いているスケールの中に、解決先のコードの構成音が含まれているか否か？でも、フレーズの考え方は変わってきます。

EオルタードからAmコードのE音に解決するパターンで、比較的、見やすい音の並びとしては、この辺りの4音の並びが特徴的に感じるので、個人的には良く弾きます。

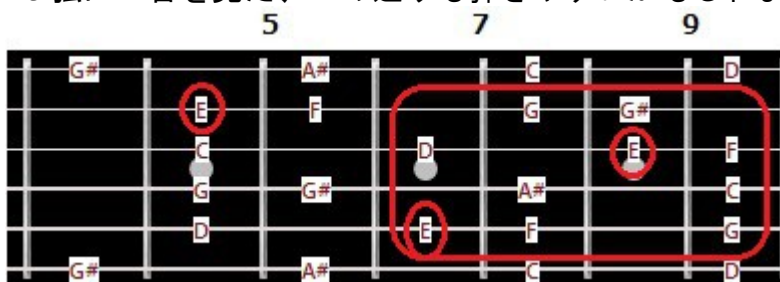


ここは、B \flat (A \sharp)リディア \flat 7th のポジションで見ても、前々回で学んでいたポジションと合致するので、分かりやすいかもしれません。

他に使いやすい場所は、先ほどの3つの譜例で使ったこの辺りや、



5 & 3 弦に E 音を見た、この辺りも弾きやすいかもしれません。



これらのポジションの見方は、別に決まりがあるわけでは無いので、自分の弾きやすい範囲や、好きな音の配置になっている場所など、自由に考えてもらって構いません。

どちらかと言えば、最初は左手の上下左右の移動を少なめにした方が、混乱はしなくなると思いますが、逆に、ポジションを大きく動くフレーズを作ってみても面白いですね。

解決感としては、AmのトニックであるA音に解決すると、よく言えば直球で落ち着く感じ(悪く言えばイモっぽい感じ)、5度のE音に解決すると、比較的大人っぽくなります。

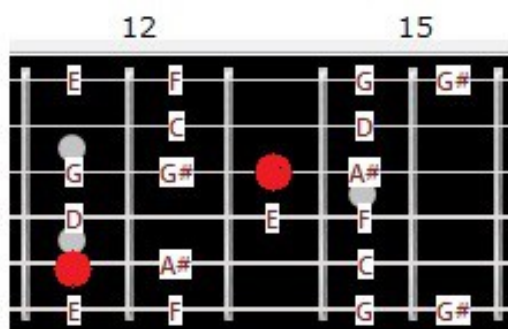
こう言った、解決先の音によって響き(感じ)が変わる、と言う部分も、色々と研究してみましょう。

さて、ここまで主に、6弦(もしくは主に4&1弦)に解決先のコードのルート音を見て、5弦にドミナント7thコードのルートと、オルタードのトニックを見るポジションで解説してきました。

その他に、代表的なコード・ヴォイシングのポジションとして、5弦(もしくは主に3弦)に解決先のコードのルートがあるパターンがありますよね。

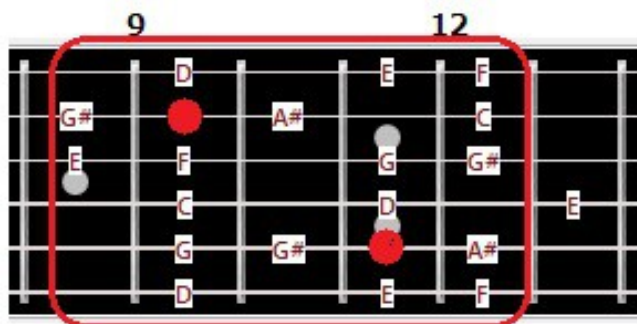
この場合、Amのルートを5弦上に見ることになるので、テキストに乗せたオルタード・スケールのポジションでは、6弦トニック(6弦12フレットE音)のものを使う事になります。

※Eオルタード・スケール、6弦トニックポジション(※赤丸はAmのルートA音)



この他にも、6弦トニックのオルタードのポジションとしては、この辺りも見やすいでしょう。

※Eオルタード・スケール、6弦トニックポジション(※赤丸はAmのルートA音)



例えば、この周辺のポジションで、E7(Eオルタード)→Am(Aナチュラルマイナー)のツー・ファイブフレーズを弾くならば、どの様に弾くのか？

ここまで学んだ考え方を活かして、自分なりに方法論を導き出してみましよう。

最初はオルタードの響きに耳が慣れていなくて、違和感を感じるかもしれませんが、段々と慣れてきます。

後はやはり、ジャズ系で頻出するオルタード・スケールなので、自分の好きなジャズ、フュージョン系のギタリストのフレーズをコピー、分析してみて、アイディアを盗んでいくと、クールなフレーズが出て来るようになるでしょう。

と、言う事で、今回は以上になります。

次回は、オルタード・スケールを使う場面(コード進行)と、その他の特殊スケールのまとめを解説していきたいと思います。

では、また次回。

ありがとうございました。

大沼